

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 3

— 平成 6 年度 —

1995. 3. 31

香芝市教育委員会

序 文

奈良県の北西部、万葉の昔から親しまれてきた二上山の麓に香芝市が位置します。

昭和31年に人口15,600人でスタートした町制も平成3年10月に市制施行し、平成7年3月現在の人口においては56,300人を超えるに至っており、伝統産業を継承しながら一方では都市化の傾向を日々増しております。

市内各地には埋蔵文化財や有形・無形の文化財が数多く残されております。近年、大阪の都市圏に隣接する地理的条件からベッドタウンとしての宅地開発等がさかんとなり、それにつれて埋蔵文化財の発掘件数も増加の一途をたどっております。

このたび、平成6年度国庫補助金事業の一環として実施しました市内遺跡3件の発掘調査結果をとりまとめ、その発掘調査概報として刊行することになりました。

この発掘調査を実施するにあたり、ご協力を賜りました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、この概報が多くの方々の目に触れ、当市の埋蔵文化財調査について深い御理解、御協力を頂ければ幸甚に存じます。

平成7年3月

香芝市教育委員会

教育長 奥嶋岩一

例　　言

- 本書は香芝市教育委員会が平成6年度国庫補助金事業（事業名：市内遺跡発掘調査）の一環として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
 - 調査は、社会教育課二上山博物館学芸員山下隆次・奥田昇・下大迫幹洋が担当した。
 - 現地調査を実施するにあたり、尼寺廃寺北遺跡では土地所有者の池田逸二郎氏、および尼寺自治会長の谷村秀雄氏をはじめとする地元の方々のご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。
 - 遺跡の空中写真撮影及び地形測量は、株式会社アイシーに委託した。
 - 本書の執筆、編集は山下がおこなった。
 - 尼寺廃寺北遺跡の調査については、下記の方々からご教示を賜りました。記して深く感謝致します（五十音順敬称略）。
- 泉森 皎・岡田英男・亀田 博・河上邦彦・小泉俊夫・塙口義信・中井一夫・濱口芳郎・森 郁夫・山川 均

目　　次

| | |
|----------------|----|
| 発掘調査位置図・発掘調査一覧 | 1 |
| 1 尼寺廃寺北遺跡 | 2 |
| I はじめ | 2 |
| II 遺跡の環境 | 2 |
| III 調査の概要 | 3 |
| IV まとめ | 9 |
| 2 狐井遺跡 | 15 |
| I 遺跡の環境 | 15 |
| II 調査の概要 | 16 |
| III まとめ | 16 |
| 3 関屋第2地点遺跡 | 17 |
| I 遺跡の環境 | 17 |
| II 調査の概要 | 17 |
| III まとめ | 18 |



第1図 発掘調査位置図

発掘調査一覧

| | 遺跡名 | 調査地番 | 調査期間 | 調査面積 |
|---|----------|-------------|-----------------------|---------------------|
| 1 | 尼寺廃寺北遺跡 | 尼寺2丁目72 | 平6. 11. 16~平7. 3. 14 | 214.3m ² |
| 2 | 狐井遺跡 | 五位堂596-5,-6 | 平6. 10. 17~平6. 10. 18 | 30m ² |
| 3 | 関屋第2地点遺跡 | 関屋535 | 平6. 10. 19~平6. 10. 26 | 32m ² |

1 尼寺廃寺跡北遺跡（尼寺廃寺跡第8次調査）

I はじめに

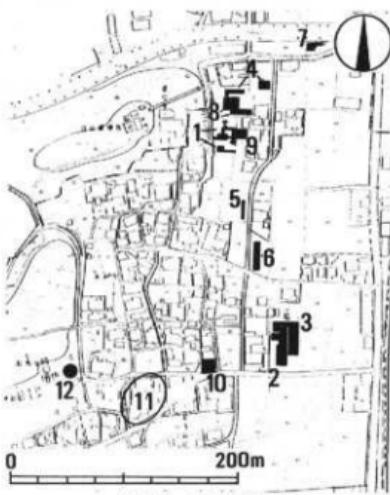
香芝市では、近年急増する開発行為に対して文化財保護の観点から昭和56年度以来、毎年国庫補助金事業を継続的に実施している（現事業名：市内遺跡発掘調査）。その目的は、各遺跡の実態を把握し、今後の開発行為に対応するためのデータ収集と自己用住宅の建築に対処するためである。これまで二上山北麓遺跡群を中心に調査がすすめられ、多くの貴重な成果を得た。そして、平成3年度からは、開発によって景観がかわりつつある尼寺廃寺跡（尼寺廃寺北・南遺跡）の範囲確認調査を開始し、実態不明な寺院跡を解明する端緒となった。

本年度は平成3年度からの継続事業として、範囲確認を目的に尼寺廃寺北遺跡の発掘調査を実施した。

II 遺跡の環境

尼寺廃寺跡は奈良県香芝市尼寺に所在する寺院跡である。古くから尼寺の集落内で古瓦が多く出土し、現在も水田の畦畔等で散見できることから寺院跡の存在が考えられた。周辺地域をみると、尼寺の集落の西に位置する厨神社の裏山の北および西側でサヌカイトの原石が分布しており、打製石器や石鐵が採集されている。また、この神社の境内には登窯と考えられる瓦窯（尼寺窯）があり、さらに、尼寺川をはさんだ南の丘陵にも6世紀後半から8世紀にわたる須恵器や瓦を焼いた窯跡群（平野窯跡群）が存在する（千賀 1983）。

さて、この尼寺廃寺跡であるが、古瓦が大きく北と南の2つの地域に分かれて分布している。北の地域は基壇状の高まりを中心に多く散布している。この基壇状の高まりは2カ所あり、その1つに今も礎石が残っていることから、平成3年度の国庫補助金事業ではこの西側を調査した（第1次調査）。その結果、基壇の基底部と



第2図 調査地周辺図

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 第1次調査（平成3年度） | 2 第2次調査（平成4年度） |
| 3 第3次調査（民間事業） | 4 第4次調査（平成5年度） |
| 5 第5次調査（民間事業） | 6 第6次調査（民間事業） |
| 7 第7次調査（民間事業） | 8 第8次調査（平成7年度） |
| 9 塔基壇 | 10 瓦窯跡 |
| 11 殿若宮 | |
| 12 尼寺窯 | |

回廊と思われる遺構が検出された（田中 1992）。

そして、南の地域は役行者をまつる薬師堂を中心に古瓦が散布している。この薬師堂には、ほぼ原位置を保っていると考えられる礎石がいくつか残っており、その西約50mにある般若院境内でかつて多くの軒丸瓦や軒平瓦が出土したことから、伽藍の一部がこの場所にあったと推定されている。

平成4年度においてこの南の寺院の東側回廊を確認するために、薬師堂の東約75mの地点を調査した（第2次調査）。その結果、期待した回廊は検出できなかったが、尼寺創建当時と考えられる掘立柱建物跡や中世の館を囲んでいたと考えられる溝等を検出した（山下 1993）。なお、最近この般若院境内に一辺1mをこえる礎石が残っていることを新たに確認した。

この北の基壇状の高まりと南の薬師堂とは直線距離にして約200mあることや、周辺の地形からみて、北と南の地域のほぼ中央に谷が存在し、この谷筋ではほとんど古瓦が出土しないことから、この尼寺廃寺跡を1つの寺院跡と考えずに、それぞれ北遺跡・南遺跡の2つに分けて考えられてきた。

平成6年度に実施した民間事業の調査において、この谷部分を2カ所調査した（第5次・第6次調査）。その結果、第5次調査では表土直下で地山が検出され、遺構・遺物は全く検出されなかっただ。しかし、第6次調査では約1.5m四方で深さ約3mの素掘りの井戸と推定幅約10m以上の川跡を検出した。この川跡の検出によって、従来から指摘されていた南北2つに分かれる寺院跡であることが実証できた。

しかし、主要伽藍の位置は未だ不明で今後の調査に期するところが大きい。

III 調査の概要

1 調査の方法と経過

尼寺廃寺北遺跡の発掘調査は、今回で4度目である。調査を実施するにあたっては平成5年度の調査（第4次調査）で回廊と考えられる遺構が検出されなかったため、今年度は昨年の調査地の南側の畠地を調査した。ここは、昨年の調査地より一段高くなってしまい遺構の残りが良いと思われた。

調査は11月16日から開始した。まず、調査地の中央よりやや西側で4m×16mのトレンチ（東トレンチ）を南北方向に設定して掘削を開始した。側溝をトレンチ西側で南北に掘削したが、焼土とともに大量の瓦が約0.3mの厚さで堆積しており、何らかの遺構の存在が予想された。11月29日にはトレンチ全面を第3層まで掘削し終えたところ、トレンチの中央やや西よりで瓦が堆積しており、この瓦の堆積が北側で中世の土坑（SK-01）で切られている状況を確認した。そして、瓦の検出作業と併行してトレンチ平面の精査を行ったところ、瓦が堆積している部分の東側に接して、幅約0.2~0.3m、南北約12.6mのバラス列を検出した。しかし、このバラス列には瓦片も若干混じっており、創建当時のものとは考え難いが建物の規模を確認するため、トレンチ南側で南へ1m、東へ幅4.3m、長さ12.5m拡張した（東トレンチ東拡張区）。しかし、建物の南端及び東端は検出され

なかった。特に、東側については後世の削平が著しい。次に、礎石の抜き取り痕跡を検出するため、当初設定したトレンチを東へ3m拡張した。そして何度も平面精査を行ったが、全くそれらしい痕跡は検出できなかった。

そこで、掘込み地業を確認するため東トレンチの北、南、東の3カ所でトレンチ内から外側にかけてたち割りを行った。その結果、トレンチ外側の北のたち割り部分で土坑（SK-01）埋没後に掘削された幅約2mの溝（SD-01）と、その北側で東西に走るバラス列を確認した。そこで、この北のたち割り部分を西にトレンチ幅で拡張してバラス列の範囲を確認することにした。その結果、バラス列は東西方向に3.3m存在することが確認できた。しかし、各たち割り部分において明確な掘込み地業は確認できなかった。

なお、東トレンチで検出した瓦の堆積範囲を確認するため、東トレンチから幅約0.5mのアゼを残して西側で3m×11mのトレンチを南北方向に設定して掘削した。その結果、全面に瓦が堆積しており、東トレンチと同様に北側で中世の土坑によって切られていることが判明した（西トレンチ）。そこで、昨年の調査区において、この西トレンチのすぐ北側で多くの瓦が堆積していたので、この堆積がどこまで続いているかを確認するため、トレンチの北西部で幅1m、長さ1.4m北へ拡張した（西トレンチ北拡張区）。その結果、昨年の調査区に続くと考えられる瓦の堆積を検出した。また、この西トレンチの西半において軒瓦が十数点出土したことから、この西トレンチ北側と拡張区で瓦を取り上げて平面精査したところ、回廊と推定されるラインと人頭大の石を数個検出した。この石は若干動いていると思われるものの、回廊推定ライン上にはほぼ直線に並んでいた。このラインは東トレンチで検出したバラス列と平行し、その間隔は約6mである。

最後に東トレンチ北側の土坑（SK-01）を掘削したところ、礎石と考えられる石などを利用した石組み造構（SX-01）を検出した。そして、トレンチ平面図等を作成後、バラス列に直交して瓦の堆積部分を2カ所たち割った。しかし、下層からは何も検出できなかった。また、たち割り部の土層の堆積をみると、北側のたち割り部ではバラス列の下層に版築らしい堆積が確認できたが、南側のたち割り部では確認できなかった。

そして、3月10日に調査区を終了し、翌11日から埋め戻しを開始したが、瓦の堆積についてはそれ自体、建物が焼失した造構であるという認識から、露出している軒瓦と完形に復元できる瓦数点のみ取り上げただけで、現状のまま埋め戻した。また、土坑（SK-01）内で検出した石組み造構についても同様に現状のまま埋め戻した。そして、3月14日に埋め戻しを完了して調査を終えた。

2 おもな遺構・遺物

(1) 遺構（第3図）

a 東トレンチ

厚さ約0.3mの瓦の堆積及び、それに接して南北方向に瓦の破片を含むバラス列、土坑（SK-01）、



第3図 遺構平面図・トレンチ配置図

その土坑の北で東西方向のバラス列、そして土坑内から石組み遺構（SX-01）を検出した。

南北方向のバラス列

幅0.2~0.3m、長さ12.6mにわたって検出した。そして、その西側で焼土とともに大量の瓦が約0.3mの厚さで堆積していた。この瓦の堆積については、平瓦が数枚重なっているなど規則性がみられないことや軒瓦が多く含まれていることから、建物が焼失した際に屋根から落ちたものと思われる。このことから考えると、バラス列は建物基壇に伴う犬走りではないかと思われる。そして、この建物については南に塔と考えられる基壇が存在することから金堂と推定される。仮に金堂とすれば、基壇は凝灰岩で構築された壇上積みであったと推定され、礎石もその上に据えられていたと考えられる。しかし、今回の調査で礎石や礎石の抜き取り、また、基壇の基底部等が検出できなかつたのは、金堂焼失後に再建された建物に伴う整地や、後世の水田造成等でこの基壇が全て削平されたことによると考えられる。このことは、南の塔基壇に残る礎石からみてバラス列が約2m低い位置にあることからも推測できる。そして、基壇構築に伴う掘込み地業については、すぐ西に迫る丘陵端部をカットした土で周辺を整地し、その上に基壇を構築して礎石部分のみ掘込み地業を行ったと考えられる。

東西方向のバラス列

SK-01のすぐ北で検出した。幅約0.4~0.5m、長さ約3.3m検出した。このバラス列は南北方向のバラス列より幅が広く、また、レベルも約0.2m低い位置にある。これは、後世の水田造成や土坑（SK-01）によって上面が削平されたためであると思われ、本来、南北方向のバラス列と続いていると考えられる。なお、このバラス列の北側で若干瓦が出土した。従って、このバラス列が基壇の北端にあたると考えられる。

SK-01・SX-01

SK-01は東トレンチの部分のみ完掘した。南北は最大で4.5m、東西は西トレンチを含めると10m以上を測る。そして、このSK-01内で礎石を割って転用したと考えられる石組み遺構（SX-01）を検出した。この石組遺構のすぐ西側で底を打ち欠かれた瓦質の甕が上向きに据えられていた。この状況からするとトイレの可能性が考えられる。なお、土坑の底から連珠文軒平瓦の破片が1点出土した。

また、西トレンチではこのSK-01の上面で瓦質の風炉が出土した。これらの遺物から中世の遺構であると思われる。なお、このSK-01の北端で幅約2.0m、深さ約0.6mの溝を検出した。この溝は東側の方が広く、西にいくほど狭くなっている。

SD-01

トレンチ平面の精査において堆積の違いを確認していたが、SK-01の埋土と考えていた。しかし、たち割りを行った際に断面を観察するとSK-01埋没後に掘削された溝であることが判明した。幅は上面で約2m、底で約1.0~0.4mを測る。この溝は南側は緩やかな傾斜であるが、北側では急

に立ち上がる。そして、水が流れるように底の部分のみ東トレンチ東端で幅1.0m、西トレンチ西端で幅0.4m、深さ約0.2m掘りくぼめていた。

b 西トレンチ

トレンチ全面で瓦の堆積、土坑（SK-01）、回廊と推定されるライン、そして、そのラインに沿って人頭大の石を数個検出した。なお、回廊と推定したことについて、瓦の堆積がトレンチ西側の方で多く、また、平瓦等が重なった状況で検出されたことから、トレンチ西側で何らかの建物が存在したと考えられ、トレンチ北側で東トレンチの南北バラス列に平行するラインを検出したことによる。

回廊推定ライン

トレンチ北西部で約5.5m検出した。この推定ラインの西側の土は、周辺の橙褐色の粘質土と違い、黄褐色の砂質土で堅くしまっていた。そして、この推定ラインに沿って人頭大の石が一部土坑（SK-01）で切られているものの8個出土した。そのうち、トレンチ壁面付近の4個はほぼ原位置を保っている状態で出土した。また、平成3年度の調査（第1次調査）でも回廊基壇の両側で人頭大の石が並んで出土していることから考えると、これらの石は回廊の縁石である可能性が高い。

(2) 遺物

東トレンチ西側及び、西トレンチから大量の瓦が出土した。以下、おもな瓦について述べる。

東トレンチ西側溝出土軒瓦（第4図）

1～6は単弁12弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配している。直径は18.1cm、中房の直径5.8cm、蓮弁の長さは4.6cmを測る。

7～12は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+7+12の蓮子を配している。外区に面連鋸歯文がめぐり、斜線の外側に平坦面を設けている。蓮弁及び子葉は平坦である。中房の直径は5.7cm、蓮弁の長さは3.2cmを測る。

13～19は中房に1+7+13の蓮子を配した複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。これも外区に面連鋸歯文をめぐらせ、斜線の外側に平坦面を設けている。蓮弁及び子葉はやや肥厚している。中房の直径は6.5cm、蓮弁の長さは2.8cmを測る。

20は中央に珠点がある3重圓文軒丸瓦である。

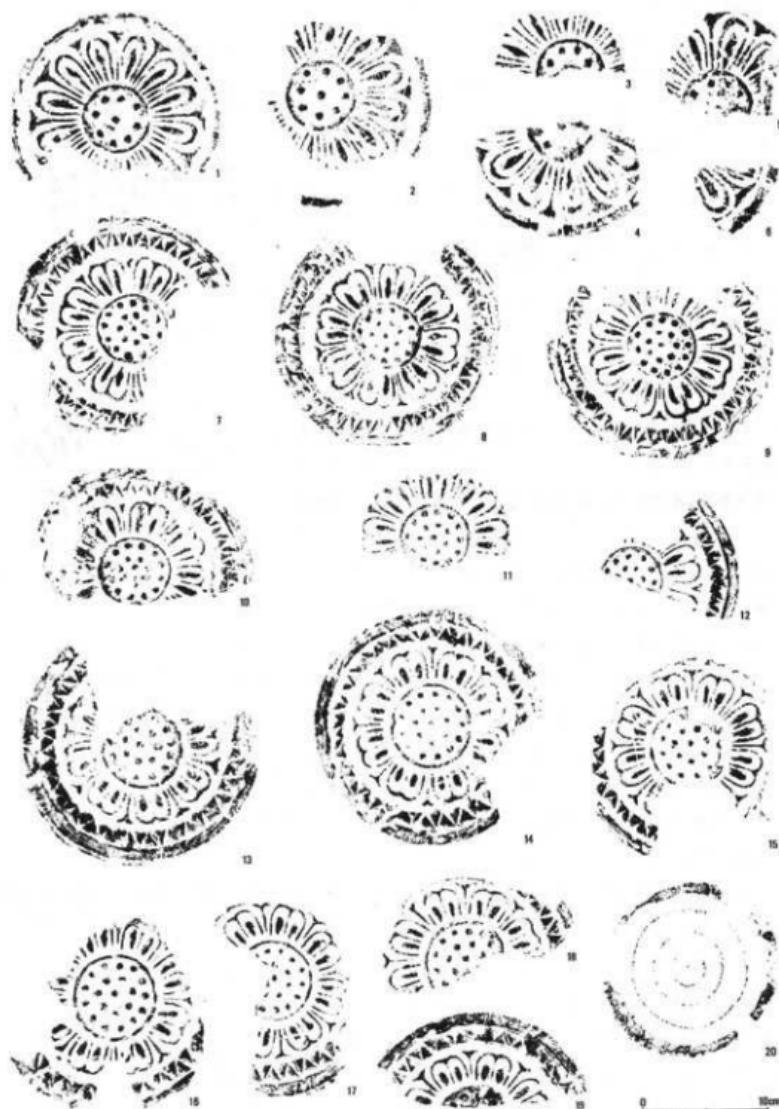
東トレンチ瓦堆積出土軒瓦（第5図）

瓦堆積部分については、露出している軒瓦のみ取り上げた。概ね西側溝と同じである。

1は中心に珠点がある3重圓文軒丸瓦である。圓線の断面は三角形状を呈す。

2は第4図13～19と同じ複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。

3は重弧文軒平瓦である。瓦当面に型引きの3重弧文を施文している。



第4図 東トレンチ出土軒瓦 1

その他、第4図1～6と同じ単弁12弁蓮華文軒丸瓦や7～12と同じ複弁8弁蓮華文軒丸瓦も出土している。

東トレンチ東拡張区南側溝出土軒瓦（第6図1～3）

1は破片であるが、中房に1+4の蓮子を配す4重圓文軒丸瓦である。平成3・5年度の調査においても出土している。

2は破片であるが、第4図7～12と同じく蓮弁及び子葉が平坦であることから、中房に1+7+12を配す複弁8弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。

3は重弧文軒平瓦で、瓦当面に型押しの細い2重弧文を施している。

東トレンチSK-01出土軒平瓦（第6図4）

連珠文軒平瓦である。この瓦は平成5年度の調査でも1点出土した。

西トレンチ出土軒瓦（第7図）

1は単弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配す。一部蓮弁にいびつな部分がある。

2～5は第4図1～6と同じ単弁12弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配す。直径は18.1cm、中房の直径5.8cm、蓮弁の長さは4.6cmを測る。

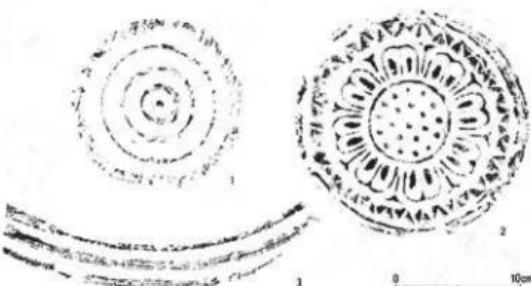
6は複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。この瓦は川原寺と同范で、他の複弁8弁蓮華文軒丸瓦と比較すると斜縁にめぐらせた面違鋸歯文の外側に平坦面がない。1点のみ出土した。なお、平成3年度の調査においても1点出土している。

7は第4図7～12と同じ複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+7+12の蓮子を配す。蓮弁及び蓮子は平坦である。外区に面違鋸歯文をめぐらす。

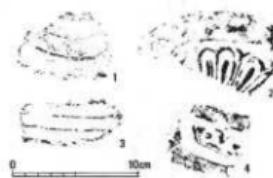
8～11は第4図13～19と同じ複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+7+13の蓮子を配す。外区に面違鋸歯文をめぐらす。

12は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8+8の蓮子を配す。中心の蓮子がやや大きい。複弁8弁蓮華文の間弁が省略され、蓮弁も中房からのびていない。1点のみ出土した。この瓦は平成3年度（第1次調査）においても破片が1点出土している。

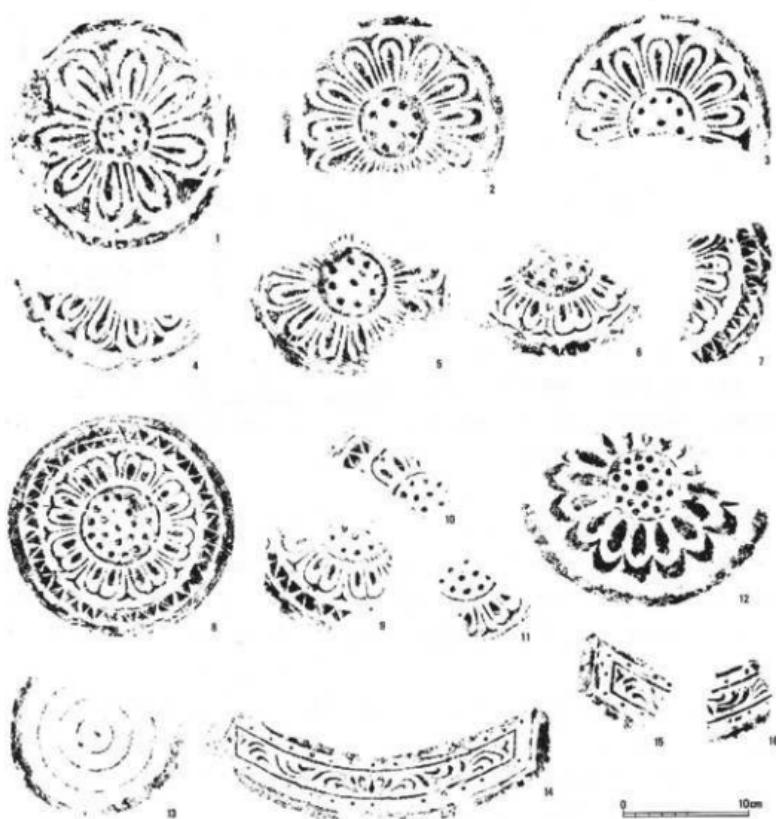
13は第5図1と同じ中心に珠点がある3重圓文軒丸瓦である。



第5図 東トレンチ出土軒瓦2



第6図 東トレンチ出土軒瓦3



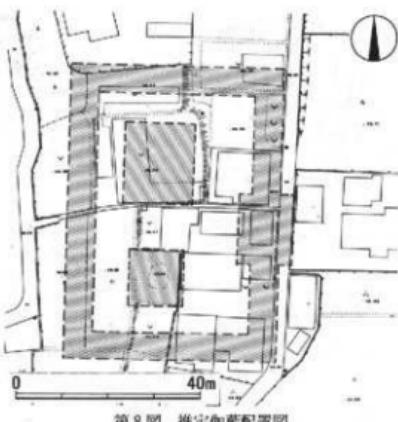
第7図 西トレンチ出土軒瓦

14～16は3回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文を配す。

IV まとめ

今回の調査において、金堂と推定される建物の基壇に伴うバラス列と回廊の一部が検出されたことで大きな成果があった。しかし、金堂と推定される建物については、基壇全体が後世の水田造成等で削平されており、正確な規模は確認できなかった。しかし、基壇の周囲にめぐらされていたと思われるバラス列が西側及び北側で検出され、また、建物が焼失した際に屋根からずり落ちたと考えられる瓦の堆積等が検出された範囲から、南北約18.0m、東西約15.0mと推定される。このこと

から考えると、建物は東西より南北の方が長くなり、東向きであった可能性が高い。そして、南に塔と推定される基壇が残っていることから、東向きの法隆寺式の伽藍が推定できる（第8図）。この東向きについては、調査地の東側を「太子葬送の道」が通っていると推定されていることから、この道を意識したことによると考えられる。今後、周辺地域の調査が進み、東側で東大門や築地等が検出されればこの推定伽藍が実証できるであろう。しかし、北約1.7kmに所在し、この尼寺廃寺跡と共通する瓦が多く出土している片岡王寺が天王寺式の伽藍であることから、今回推定した伽藍が正しいかどうか、疑問をもちながら慎重に調査を進める必要がある。



第8図 推定伽藍配置図

付 載1 殿若院境内表採軒瓦（第9図）

殿若院は今年度調査した北遺跡に対して、南遺跡に含まれる。南遺跡は平成4年度の国庫補助金事業及び平成5年度の民間事業で発掘調査を実施した。しかし、中心部にはすでに家屋が立ち並んでいるため、範囲確認調査を実施するには困難な状況にあり、主要伽藍を解明するには至っていない。

今回掲載する資料は『香芝町史』すでに一部写真で掲載されているが、未掲載のものを含めてあらためて紹介する。

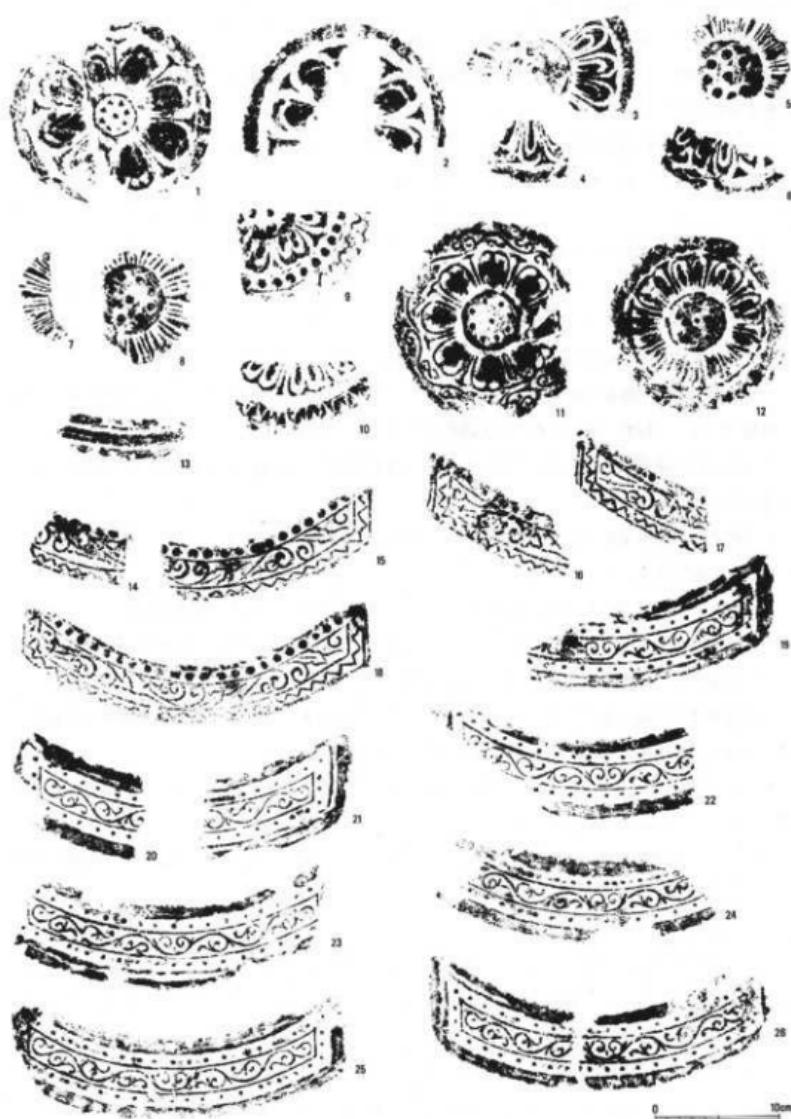
1・2は単弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配す。蓮弁及び子葉は厚肉である。直径16.1cm、中房の直径は3.8cmである。

3~8は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配す。中房の直径は6.2cm、蓮弁の長さは3.6cmである。12弁のものと比較するとやや小ぶりで、周縁には線鋸歯文をめぐらせ、たちあがりも低い。

9は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に連珠文、外縁に線鋸歯文がめぐる。蓮子の数は不明である。

10は破片であるが、蓮弁及び子葉が平坦なことから、中房に1+7+12の蓮子をもつ複弁8弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。外区に面連鋸歯文をめぐらせ、斜縁の外側に平坦面を設けている。

11・12は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配す。蓮弁は簡略化されており、外区には唐草文をめぐらす。12は2回瓦筋を押し付けたため、蓮華文等がやや不鮮明になっている。直



第9図 般若院境内表採軒瓦

径は16.1cm、中房の直径は5.0cmである。

13は重弧文軒平瓦で、瓦当面に型引きの3重弧文を施文している。

14~18は内区に左から右に流れる偏行唐草文をおき、上外区に連珠文、下外区と脇区に線鋸齒文を配する軒平瓦である。

19~26は4回反転の均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文をめぐらす。この瓦はこれまでの発掘調査では確認されておらず、般若院境内のみ知られる瓦である。

付 載2 第1次調査（平成3年度）出土瓦（第10図）

すでに概要報告書にて一部報告されているが、未報告資料が多いため今後比較検討する資料として、すでに報告されている瓦も含め紹介する。

1は第9図1と同じ単弁8弁蓮華文軒丸瓦である。

2~4は単弁12弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配す。なお、3については平成3年度の概報で、誤って16弁と報告されている資料である。

5は単弁16弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配す。直径は17.1cm、中房の直径6.2cm、蓮弁の長さは3.6cmである。

6は複弁6弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+8の蓮子を配す。中心の蓮子が大きいくつくりられている。外区に線鋸齒文がめぐる。

7は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+6+10の蓮子を配す。外区に線鋸齒文がめぐる。

8は複弁8弁蓮華文軒丸瓦である。この瓦は川原寺と同型で、他の複弁8弁蓮華文軒丸瓦と比較すると斜縁にめぐらせた面達鋸齒文の外側に平坦面がない。

9は蓮弁及び子葉が平坦なことから、中房に1+7+12の蓮子を配す、複弁8弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。面達鋸齒文がめぐる斜縁の外側に平坦面を設けている。

10~12は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に連珠文、外縁に線鋸齒文がめぐる。蓮子の数は不明であるが、1+5+9と考えられる。

13は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、中房に1+7+13の蓮子を配す。面達鋸齒文がめぐる斜縁の外側に平坦面を設けている。

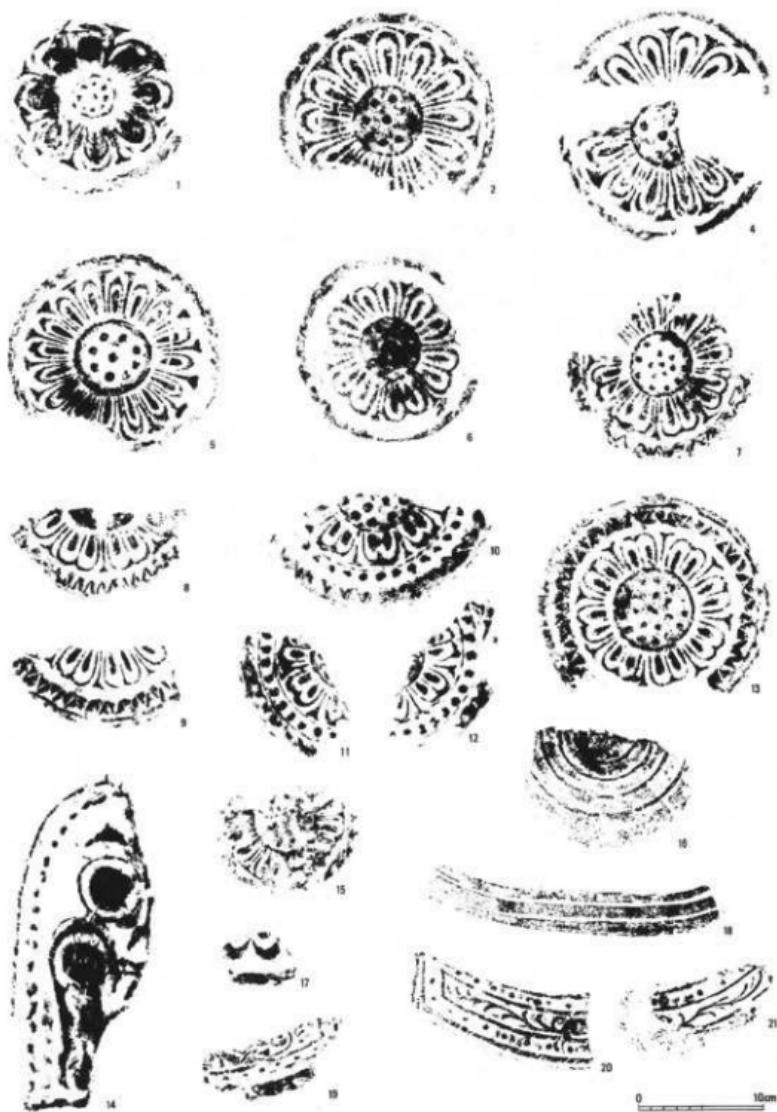
14は鬼瓦である。1点のみ出土している。

15は単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。中房はくぼんでおり、1+4+8の蓮子を配すがあまり鮮明ではない。直径は12.4cmと小型で、中房の直径5.0cm、蓮弁の長さは2.5cmを測る。焼成は不良である。

16は中央に1+4の蓮子を配す、4重圓文軒丸瓦である。

17は今年度の調査でも1点出土した、単弁16弁蓮華文軒丸瓦の破片である（第7図12）。

18は重弧文軒平瓦で、瓦当面に型引きの3重弧文を施文している。



第10図 第1次調査出土瓦

- 19は軒平瓦で、外区に珠文をめぐらす。
- 20・21は均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文をめぐらす。
- その他、今年度西トレンチで出土した3回反転の均整唐草文軒平瓦（第7図14～16）と巴文軒丸瓦が出土している。

参考文献

- 石田茂作 1996 「飛鳥時代寺院址の研究」
- 田中史生 1992 「尼寺廃寺北遺跡発掘調査概報」 香芝市教育委員会
- 千賀 久 1983 「北葛城郡香芝町平野窯跡群発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』）
- 保井芳太郎 1932 「大和上代寺院志」
- 山下隆次 1993 「尼寺廃寺南遺跡発掘調査概報」 香芝市教育委員会
- 山下隆次 1994 「香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 1」 香芝市教育委員会



第11図 調査地周辺地形測量図

2 狐井遺跡

I 遺跡の環境

狐井遺跡は香芝市狐井の集落東方、通称狐井丘陵の南東一帯に広がる遺跡である。この遺跡は、昭和10年ごろ遺跡の北東に位置する改正池で縄文土器や石器などが採集され、翌11年に樋口清之氏により報告され（樋口 1936）その存在が知られるようになった。この報告によると、土器は縄文時代後期から晩期で注口土器が1点含まれている。石器は石器のほか石匙や磨製石斧などがある。また、改正池が補修された際に池底から黒色泥炭化した樹木や木葉、クルミ等の果実に混じって多数の土器が出土したことでも報告されている。その後、個人住宅建築や宅地造成に伴う発掘調査によって、縄文時代から平安時代にわたる複合遺跡であることが判明した。しかし、発掘面積が狭いことや発掘件数が少ないものもある、遺跡の中心地と考えられる遺構等は確認できていない。

なお、平成5年度に実施した宅地造成に伴う調査では、縄文時代前期の北白川下層Ⅰ式から中期初頭の大歳山式までの土器が約3,000点出土した。この中には奈良県で初めての特殊浅鉢形上器の破片が3点以上や関東地方の諸式の影響を受けた浅鉢、表面に彩色を施したもの11点、底部内面に漆が付着したもの1点など貴重な資料も含まれてた。また、土器に伴って大量のサヌカイト片や石器、獸骨も出土した。サヌカイト片はコンテナで約20箱程度出土し、数万点にのぼる。石器は石器600点以上のほか石匙、石錐、石槍、石槍木製品などがあり、石器製作に使用されたと考えられる敲石も多数出土した。なお、獸骨はイノシシとシカである。この平成5年度の調査によって、これまで当遺跡が縄文時代後期から晩期中心であ

ると考えられてきたが、前期までさかのぼることが判明した。しかも、出土した遺物から石器製作に深くかかわっていた、近畿地方の拠点的な集落であったことをうがい知ることができた。

また、周辺地域で縄文時代の土器が出土した遺跡をみると、北約800mに下田東遺跡があり、高山寺式の押型文土器1点を含む早期から晩期の土器が出土している（小泉・辻・山下 1980）。また、北西約500mには前期から晩期の土器が

出土した瓦口森田遺跡（佐藤・青木 1989）がある。



第12図 調査位置図

1 調査地

2 平成5年度調査地

3 改正地

II 調査の概要

今回の調査は、五位堂569-5番地他において自己用住宅建築が計画されたため、平成6年7月27日付けで施主から「発掘届出書」が提出されたことに始まる。ここは、平成5年度において縄文時代前期の土器が大量に出土した場所から東へわずか約40mの地点で、関連する何らかの遺物等が出土することが予想された。しかし、すでに建物の基礎工事が完了しており、香芝市教育委員会が施主と協議した結果、工事を一時中断して建物の基礎以外の部分で発掘調査を実施することになった。調査は10月17日にすでに工事が完了している建物基礎の東側（Aトレンチ・2m×7m）及び西側（Bトレンチ・4m×4m）に調査区を設定した。そして、翌18日から掘削することにした。

まず、Aトレンチから掘削を開始した。しかし、整地土の下層で自然流路を検出したが明確な遺物包含層や遺構は検出できなかった。また、自然流路による大量の涌き水のためトレンチ内の作業が危険な状況となり、写真撮影のあと土層柱状図を作成して埋め戻すこととした。

次に、Bトレンチを掘削したが、Aトレンチと同様に整地土下層から自然流路を検出したが遺物包含層や遺構は検出できなかった。そして、大量の涌き水によってトレンチが崩壊する危険性があったため、写真撮影のみを行い、ただちに埋め戻した。

III まとめ

今回の調査では期待された遺構や遺物は出土しなかった。しかし、平成5年度の調査地東側に自然流路の存在が判明したことによって、遺跡の中心が今回の調査地の西側にあることがほぼ確実となつた。今後、周辺地域を調査する上で重要な知見を得ることができた。

参考文献

- 小泉俊夫・辻 俊和・山下隆次 1980 「押型文土器を出土した香芝町下田東遺跡（一）」（『青陵』第46号）
佐藤良二・青木勲時 1989 「瓦口森田遺跡」 香芝町教育委員会
樋口清之 1936 「新発見の縄文式土器出土遺跡－大和下田村狐井遺跡－」（『大和志』第3巻第11号）

3 関屋第2地点遺跡

I 遺跡の環境

関屋第2地点遺跡は近鉄関屋駅北東、前川と西名阪自動車道にはさまれた丘陵部に立地する石器時代の遺跡である。昭和49年にサヌカイトの小形剥片や碎片が採集されたことで、この遺跡が発見された（増田 1974）。そして、昭和60年度には遺跡範囲の南隣接地で発掘調査が実施された（佐藤 1986）。その結果、調査地点において遺物包含層や遺構は皆無であったが、客土から楔形石器や二次加工のある剥片、石核などが出土した。

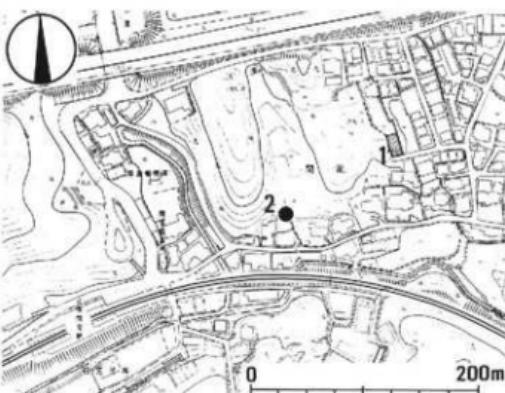
今回の調査地は遺跡推定範囲のほぼ中央に位置し、北から派生する丘陵東側のゆるやかな斜面に位置する。調査地の東側はすでに宅地開発によって削平されており、調査地とは約3mの比高差がある。しかし、調査地はすでに畑として開墾されているものの旧状をとどめており、周辺の地形から何らかの遺構の存在が予想された。

II 調査の概要

今回の発掘調査は、自己用住宅建築のために平成6年7月27日付けで施主から発掘届出書が提出されたことに始まる。そして、香芝市教育委員会が施主と協議して発掘調査を実施することになった。

調査は10月19日から開始した。まず、調査地の西側に水道管が埋設されているということから、この水道管の位置を確認するために入力で掘削した。そして、水道管を避けて4m×8mのトレンチを南北方向に設定した。トレンチ掘削は、石器時代の遺跡ということもあり、当初、人力で行う予定であった。しかし、地盤が予想以上に堅固なために、人力による掘削は困難な状況であった。そして、遺物も皆無であることから翌20日に急拠、重機を搬入して掘削することとした。

その結果、南側で溝状の落ち込みを確認したが、精査の結果、遺



第13図 調査位置図

1 調査地 2 昭和60年度調査地

物等は出土しなかった。そして、形状及び周辺の地形から自然の侵食による流路であると判断した。そして、明確な遺構や遺物包含層が検出されないままトレンチ北側では地表下5cm、南側では地表下20cmで地山となり、10月26日に埋め戻しを完了して調査を終了した。実働は6日を要した。

III まとめ

今回の調査では期待された遺構や遺物は検出できなかった。しかし、調査の結果から仮に遺構や遺物がかつて存在していたとしても、後世の侵食により流された可能性が考えられた。したがって、今後、今回の調査地から西に広がる丘陵頂部から斜面に注意する必要がある。

参考文献

- 佐藤良二 1986 『鶴峯荘第1地点遺跡 第2次発掘調査概報』 香芝町教育委員会
増田一裕 1974 「補 関屋第2地点遺跡」(『ふたがみ』)



調査前の景観（西から）



調査地全景（西から）



調査トレンチ全景（東から）



東・西トレンチ瓦堆積状況（北から）



東トレンチ全景（北から）



東トレンチ東拡張区全景（西から）



東トレンチ瓦堆積状況（西から）



東トレンチ瓦堆積状況（西から）



東トレンチ SX-01 (北から)



西トレンチ北拡張区瓦堆積状況 (北から)



西トレンチ全景 (北から)



調査後の景観（西から）



香塔寺所在塔礎石・心礎？（南西から）



調査前の景観（南から）



A トレンチ東壁地層断面



調査前の景観（北から）



トレンチ全景（北から）

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 3

— 平成 6 年度 —

編集行 香芝市教育委員会

香芝市本町 1397 番地

印刷 明新印刷株式会社

奈良市南京終町 3 丁目 464 番地